「男、突っ走る！」

第49回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（20）　名古屋芸術専門学校２年生

眞榮田　浩平（20）　名古屋芸術専門学校２年生

長井　夏美（20）　名古屋芸術専門学校２年生

植野　雪奈（20）　名古屋芸術専門学校２年生

本部　明美（19）　名古屋カフェ調理専門学校１年生

1　名古屋芸術専門学校・４階・４０２教室～廊下（朝）

雅也が、『なご弁新聞』を熟読している――廊下から夏美が通りかかると、入ってくる。

夏美「おはよ、うっちー」

雅也「おはうっちー」

夏美「何それ？」

雅也「流行らせようかなって」

夏美「流行んないと思うけど」

雅也「そう？」

夏美「卒業進級制作展終わったのに、こんな朝から学校来てるの？」

雅也「ポートフォリオ作んなきゃいけないからね」

夏美「何読んでたの？」

雅也「『なご弁新聞』」

夏美「ああ、バイトしてるっていうフリーペーパー？」

雅也「そうそう。（と夏美に渡して）裏面、

見てみて」

夏美、『なご弁新聞』の裏面を見る――『連載小説　歩のあゆむ道』のタイトルと、本文の最後に『文／木内雅也』と書かれている。

夏美「あれ、うっちー連載小説書いてるの？」

雅也「それ、毎月一日と十五日の二回発行なんだけど、この間の十五日号から連載小説書かせてもらうことになったの」

夏美「すごいじゃん、さすがはうっちー」

雅也「元々はイベント告知記事がずっと続いてたんだけど、前の編集会議で、『続きが気になる連載ものを掲載したら、固定の読者ファンが増えるんじゃないか』って提案してみたの。そしたら、とんとん拍子で連載小説が決まっちゃって」

夏美「うっちーはずっと書いてきたんだもん、その努力が認められたんだよ。（と中身を見ながら）どうして、主人公が若手営業マンなの？」

雅也「その『なご弁新聞』のメインターゲットは、伏見とか丸の内で働いてるビジネスマンなの。だから、自分と同じような環境で働いてる、身近なキャラクターを主人公にしたほうが良いんじゃないかと思って。連載って言ってるけど、内容としては一話完結なの。それで、いろんな話をこれから展開していこうかなって」

夏美「本当に、連載もった作家みたいになってるじゃん」

雅也「俺、ファンタジーとかＳＦとかのジャンルって苦手でしょ。サラリーマンみたいな等身大の人間を主人公にした物語のほうが書きやすくて」

夏美「確かに、あまりうっちーにファンタジーは似合わないかも」

雅也「でしょ。（と苦笑して）今後の構想はまだ全然考えてないんだけど、しばらく十五日号は連載書かせてもらうから、一ヶ月に一話っていうペースで、次のエピソード

考えなきゃと思って」

夏美「せっかくそういう実績ができたんだもん、それもポートフォリオに入れなきゃね」

雅也「うん。ポートフォリオに何を入れようか考えてたんだけど、授業課題も入れたほうが良いのかな？　なつ姐さん、どうしてる？」

夏美「一応授業課題は入れてるけど、全部の授業は入れてないよ。その中でも、自信作とかある程度クオリティが良いものに厳選してる。全部が全部入れてたら、中にはあまり出来の悪い課題もあるからね。さすがにそういうものまでは、ポートフォリオには入れないほうが良いと思って」

雅也「なるほどねぇ」

夏美「あまり時間がないかもしれないけど、ポートフォリオ作り頑張ってね。来月には、ポートフォリオ集中講座もあるんだから」

雅也「うん、あと約一ヶ月。何とか、みんなと同じクオリティになるように、頑張るわ」

夏美「根詰めて、無理しないようにね。あ、私、隣にいるから何かあったら相談においでね」

雅也「うん」

夏美、雅也の頬を掴んで、

夏美「ファイトだよ、うっちー」

雅也「ありがと」

と、出ていく夏美――『なご弁新聞』をスキャナーに取り込む雅也。

2

同・同・廊下

弁当を食べている雅也――エレベーターが開き、浩平が登校してくる。

雅也「お疲れ」

浩平「お疲れ、うっちー。いつからいるの？」

雅也「朝から」

浩平「制作展終わって、少しはひと段落すればよいのに」

雅也「そうしたいのは山々だけど、ポートフォリオ、なるべく早く完成させなきゃと思

って」

浩平「ああ、そうだったな」

雅也「参考になるものがないんだよね」

浩平「文章系の先輩って、ポートフォリオ作ってないのか？」

雅也「作ってるわけないじゃん。うちらの先輩、結局一般就職に行った人がほとんどで、在学中にデビューした人なんていないだから。まあ、たまにアルバイトでＷＥＢライターになった先輩はいるって聞いたことあるけど。でも、それじゃあ、何のために専門学校で文章を学んでるのか分かんないでしょ。デビューする気あるのかな、先輩たち」

浩平「まあ、文章系の人達は、個人プレイで自分のことで精いっぱいの人たちばっかりがいる印象だからな。その中で、うっちーが特殊すぎるキャラクターなんだよ」

雅也「入学してから、この春で丸二年経つけど、俺もまさか、自分がこんなにも他専攻

の友達がたくさんできるなんて思わなかったし、学校行事にバンバン参加したり、みんなで遊んだりご飯行ったりするようになるなんて思わなかったけどね」

浩平「そろそろ、就職に向けての準備やらインターンの準備も始めないとな」

雅也「あ、そういえば早速、キャリアセンターから、インターンだったか何かの一斉メール届いてたね」

浩平「そういうメールが、これからしょっちゅう来るんだろうな」

雅也「テレビ局の下請けの制作会社のインターン受けるんだっけ？」

浩平「ああ。大久保と一緒に」

雅也「二人とも、ゴリゴリの映像系だもんね。ポートフォリオは、もう結構進んでる感じ？」

浩平「何とかね」

雅也「あ、せっかくだから、俺のポートフォリオ見てくれる？　まだ、全然途中なんだ

けど」

浩平「ああ、良いぞ」

雅也「ありがとう、ちょっと待ってて」

と、４０２教室へ入ると、制作途中のポートフォリオのファイルを持ってくる。

雅也「これなんだけど」

浩平、中身を見ていく――不安そうに見ている雅也。

雅也「どう？」

浩平「文章ばっかりだな」

雅也「だよね……」

浩平「この長文じゃ、読まないな」

雅也「作品全部を入れるの、やっぱり無理かな。でもさ、イラストとかＣＧとかデッサンみたいに、文章ってパッと一目で分かるようなもんじゃないでしょ。読んで初めて意義があるんだもん。それに、漫画みたいに作品そのものをファイルに入れただけなんて、それじゃただのファイリングになっ

ちゃうしね……ああ、どうしよう」

浩平「うーん、文書系のポートフォリオなんて考えたこともなかったもんな」

雅也「眞榮田のポートフォリオは、どんな感じ？」

浩平「ああ、見てみるか？」

雅也「うん」

浩平、雅也の隣に座ると、ＣＤジャケットのような正方形の紙が糊付けされている小冊子を取り出して、雅也に渡す。

浩平「はい」

雅也「ありがとう。（と見始めると）凄ッ……こういうのポートフォリオもあるんだ」

浩平「鈴本先生に言われたんだよ、個性を出せって」

雅也「確かに、ファイリングされたものより、こういうもののほうがインパクトは残るもんね」

浩平「テーマとコンセプトって、一年生の時

にやったの覚えてる？」
雅也「うん」
浩平「そこを意識すれば、ブレずにちゃんとしたポートフォリオができるんだよ。あれもこれもって作品を入れると、全体の統一感がなくなるんだよ」
雅也「なるほど」
浩平「うっちーもさ、せっかく個性の塊で歩くフリー素材なんだから、もっと自分の色を出したほうが良いと思うぞ。ただ、文章を印刷した紙をファイリングしたって、相手の印象には残らない」
雅也「確かに、俺が採用担当者だったら、絶対に印象に残らないだろうな」
浩平「しょぼいものじゃなくて、ぶっ飛んだものを作って『何だこれは』と相手に思わせたら、こっちのもんだよ」
雅也「ぶっ飛んだものか……」
浩平「雑誌とか、そういうのも参考にしてみたらどうだ？　せっかくうっちー、そうい

う紙媒体に詳しいんだから」
雅也「そうだよね……」
浩平「（苦笑して）悩め悩め、悩むんだうっちー（と４０１教室に入っていく）」
雅也「どうしようかなぁ……」

３　同・同・４０３教室
雪奈がパソコンで作業をしている――
ファイルを持った雅也が入ってくる。
雅也「お疲れ、ゆきちゃん」
雪奈「ああ、うっちー、お疲れ」
雅也「ゆきちゃんも、ポートフォリオ作ってた？」
雪奈「も、って、うっちーもポートフォリオ作ってるの？」
雅也「デビュー活動で、ポートフォリオがあったほうが良いんじゃないかなと思ってね。でも、文章系のポートフォリオの前例がないから、思い切り苦戦してるの」
雪奈「確かに、文章系のポートフォリオ見た

ことないわ」
雅也「（ポートフォリオを見せて）まだ、途中段階なんだけど、どうかな？」
雪奈、雅也のポートフォリオを見ていく。
雪奈「うーん、私なら最後まで読まないかな」
雅也「なるほど……」
雪奈「何だろうな、デザインが安っぽい感じがするんだよね」
雅也「安っぽい？」
雪奈「うん。学校で配られるおたよりみたい」
雅也「ああ、言われてみれば」
雪奈「うっちー、結構タイトルにポップ体のフォント使ってるでしょ」
雅也「うん」
雪奈「だからだよ。こういうのって、シンプルな明朝体やゴシック体のほうが良いんだよ」
雅也「そうなんだ」
雪奈「特に、うっちーは文章系なら、全体を

明朝体にして、ちょっと堅いイメージにしてみたら良いんじゃない？」

雅也「明朝体か……」

雪奈「まあ、前例がないポートフォリオだから、私が変に偉そうに言うのもなんだけどね」

雅也「いや、ありがとう。助かる。どうしても、自分一人で作ってるとさ、何が正解で何か間違いなのか、分からなくなっちゃうんだよね。眞榮田からも、こんな長文は読まないなんて言われちゃって」

雪奈「そっか」

雅也「あ……ごめん」

雪奈「良いよ、もうあいつのことなんて何とも思ってないから。もう一年以上経つんだよ、別れて」

雅也「まあ、そうだけど」

雪奈「しばらく四階にも来てなかったから、向こうも何とも思ってないでしょ」

雅也「だと良いけど」

雪奈「それに、最後の年にでもなれば、恋愛系の話はないんじゃないかな」
雅也「就活が始まっても、恋愛する人はするでしょうよ。俺たちの代だって、何組のカップルが誕生して、何組のカップルが別れて、何組のカップルが現在進行形だと思ってるの」
雪奈「耳が痛いなぁ」
雅也「前にチラッと聞いたけど、ゆきちゃんも大変だったんでしょ。最近別れた彼氏っていうの」
雪奈「そうそう。束縛がひどくてね、別れて気が楽になったわ」
雅也「プライベートでトラブルを抱えると、学校生活にまで影響が出ちゃうからね」
雪奈「どうして分かるの？」
雅也「（苦笑して）あ、恋愛経験がないくせにって思ってるんでしょ？」
雪奈「いやいや、そういうつもりで言ったわけじゃないよ」

雅也「分かってるよ。まあね、いろんな人見てれば、自分が経験してなくても分かっちゃうもんなの」
雪奈「そっか」
雅也「ごめん、邪魔したね。意見ありがとう、また直してみるわ」
雪奈「うっちーなら個性満載のポートフォリオ作れると思うよ、頑張って」
雅也「うん、ありがとう。じゃあね（と出ていく）」

4　同・同・402教室

雅也が険しい顔でパソコンを見ながら作業をしている――と、ノック音が聞こえる。
雅也「はい？」
と、ドアが開き、明美が入ってくる。
明美「せーんぱい！」
雅也「あれ、明美ちゃんどうしたの？」
明美「教務に聞いたら、ここにいるって教え

てもらいました」
雅也「どうしたの？　何かあった？」
明美「（タッパーを取り出して）今日のオープンキャンパスで、シフォンケーキ作ったんです。余ったんで、先輩に持ってきました」
雅也「ありがとう。一日頭使ってて、糖分欲しかったんだ」
明美「今日、オープンキャンパスのスタッフ入ってなかったんですね」
雅也「ああ、それなんだけど、俺この三月で学生スタッフ卒業しようかと思ってるの」
明美「え？」
雅也「入学事務局の吉野さんにも相談してあるの。三年生からは、デビュー活動に専念しようかなと思って」
明美「先輩がスタッフからいなくなったら、私寂しいっすよ」
雅也「ありがとう。けど、学生スタッフを卒業するだけで、学校にはいるんだもの。ま

たこうやって、いつでも遊びにおいでよ」
明美「こっちにも遊びに来てくださいよ。授業課題で作りすぎたお菓子とか、先輩にあげますよ」
雅也「ああ、それなら喜んで行くよ。うちらは頭使ってるから、甘いものが欲しくなるからね」
明美「先輩、三月下旬か四月上旬、鶴舞公園行きませんん？」
雅也「鶴舞公園？　何かあるの？　あ、分かったポケモンＧＯか？」
明美「違いますよ。お花見です」
雅也「ああ、そっちか」
明美「私がポケモンＧＯやると思います？　それに先輩だってやらないでしょ」
雅也「まあ、やらない」
明美「鶴舞公園のお花見、夜でも綺麗なんですよ。私も先輩も、どうせ日中は学校で忙しいんで、学校終わりの夕方から行きませんか？」

雅也「お花見かぁ。そういえば、産まれてからお花見っていうお花見行ったことなかったもんな」

明美「綺麗っすよ、鶴舞公園の夜桜」

雅也「そうなんだ、行ってみようかな」

明美「行きましょうよ。絶対、約束です」

雅也「随分グイグイ来るじゃん、明美ちゃん。何、他に行く人いないの？」

明美「先輩とだから楽しいんじゃないですか」

雅也「先輩って、明美ちゃんには明美ちゃんで、カフェ調理のほうで直属先輩がいるでしょ。うちらの学校とじゃ、全然勝手が違うんだから」

明美「そんなに先輩との接点ないんですよね。それに、木内先輩なら誘いやすいと思ったんで」

雅也「まあ、知らないおばあさんに道をよく尋ねられるぐらいだからね。俺には、よっぽど声を変えやすいオーラが出てるんだろうね」

明美「それは間違いないと思います。ねえ、行きましょうよ、お花見」
雅也「行ってみるか」
明美「言いましたね？　約束ですよ」
雅也「約束するって。俺はね、約束はちゃんと守る主義だから」
明美「じゃあ、楽しみにしてます」
雅也「桜の見ごろって考えると、一番良いのは四月入ってすぐぐらいかな？」
明美「良いっすね」
雅也「人多そうだな。俺、人混み苦手なんだよね」
明美「平日に行けば、まだ人は少ないと思います」
雅也「そっか、平日の夜っていう手があるな」
明美「この時期だと、出店とかもあるみたいですよ」
雅也「絶対楽しいやつだ」
明美「原稿書くのも良いですけど、根詰めてもダメですよ。桜見て、息抜きしましょ」

雅也「うん、そうだね。俺ってさ、どうしてもエンジンかかっちゃうと、ずっと集中モード入っちゃって、手が止まらなくなっちゃうんだよね」

明美「まあ、気持ちは分からなくもないですけどね」

雅也、鞄からスケジュール帳を取り出すと、

雅也「忘れないうちに、大体この辺で見に行くって仮の予定抑えとこ」

明美「お願いします。近くなったら、また連絡しますね」

雅也「うん、よろしく」

明美「やったー、先輩とお花見だぁ」

笑って明美を見ている雅也。

つづく